

東京散歩 ～ 赤穂浪士討入り後の引揚げコースを辿る（続編）

赤穂浪士討入りにまつわるエピソードを、引揚げ途上を主体に紹介します。

討入り時の四十七士は、平均年齢が37歳(70代×1、60代×5、50代×4、40代×4、30代×18、20代×13、10代×2)、その中には8組の親子がいました。また、戦闘間の怪我人は10人ほどでした。

浪士の名前には、討入り時の数えの年齢や親子関係などを（ ）内に加筆しました。

なお、先月の「赤穂浪士討入り後の引揚げコースを辿る」に誤りがありました。「11.」の文中、「◎は中央大橋」とありますが、正しくは「◎は新大橋」ですので、読み替えをお願いします。

1. 両国橋東詰付近での浪士たちの様子

写真左：両国橋東詰付近

写真右：「江戸名所図会 両国橋」（文化6年(1809)刊行）東詰付近の切抜きです。

両国橋東詰広場で浪士たちを目撃した佐藤條右衛門(堀部安兵衛の従兄弟)は、その様子を【佐藤條右衛門覚書】に記しています。

怪我をした近松勘六(33)が両国橋の欄干に寄り掛かっていたので、「如何致された」と尋ねると、「敵を追いかけ、深追いで池にすべり落ちてしまった」と話していた。横川勘平(36)も左の小指や唇に疵を負っていたし、股も負傷していたようだ。

一番槍の間十次郎(25、喜兵衛惣領)は吉良殿の首級を持って自分に見せたので、「さてこそ御手柄でおめでとう」と声を掛けた。

冨森助右衛(33)門が袖印の白い布をはずし、「これを、長太郎(嫡男)に届けてくれ」と頼むので承知した。

武林唯七(31)が、「吉良殿を討ち留めた刀が物に当たり曲がってしまった。このことを今、貴殿に話しておくの

で、後日の証人になって欲しい」と話しかけてきたので、「なる程、御手柄でござる。御本望おめでとう」と、言葉を返した。



2. 新大橋東詰付近での浪士たちの様子

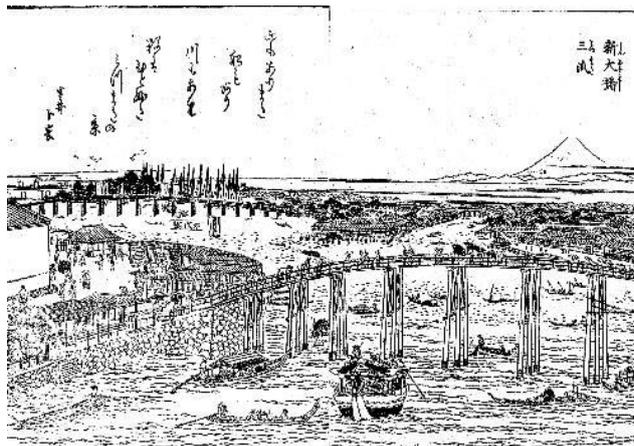
写真左：新大橋東詰付近

写真右：「江戸名所図会 新大橋」 東詰付近

当時の新大橋東詰は広小路や荷揚場、舟番所などがあって江戸市民で賑わい、駕籠屋の溜まり場にもなっていました。この広場での様子も【佐藤條右衛門覚書】に記されています。

近松勘六、横川勘平、間瀬久太夫(62、惣領孫九郎・22も討入り)、神崎与五郎(37)、間喜兵衛(68、惣領・次男も討入り)、村松喜兵衛(61、惣領三太夫・26も討入り)、堀部弥兵衛(76、養子安兵衛・33も討入り)、奥田孫太

夫(56、養子貞右衛門・25 も討入り)、木村岡右衛門(45)らが駕籠に乗った。はじめ駕籠屋は難渋を示したのであるが、頼み込んで雇ったのである。

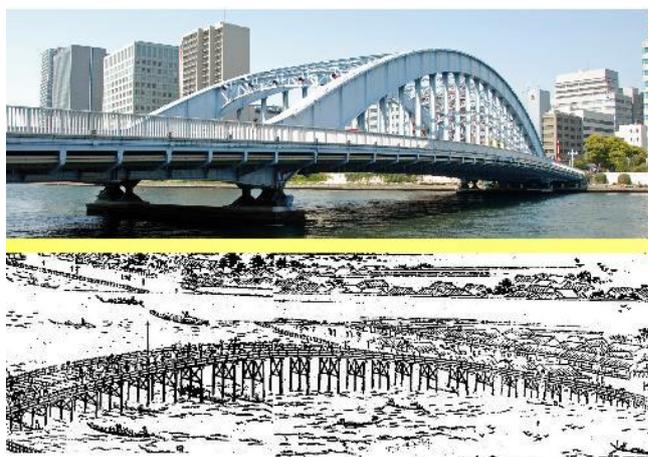


3. 永代橋を渡る直前の休息(伝承)

写真左：「赤穂義士休息の地」付近。突当りを右折すると直ぐ先が永代橋です。

写真右：永代橋+「江戸名所図会 永代橋」の切抜きの合成写真(永代橋の今昔)です。

永代橋より 50m 余り上流(北)側(当時の永代橋よりも 80m ほど下流側)に「赤穂義士休息の地」の碑が建てられています(昭和 38 年)。それには、「四十七士の一人大高源吾(31)の俳界の友である味噌屋の初代店主は、一同を店に招き入れ甘酒粥を振る舞い労を犒らった」という内容が記されていますが、「赤穂義士の引揚げ」(街と暮らし社)では、「他の史料では確認されない」となっています。なお、「大高源五」が正しい名前です。



4. 霊岸島における浪士の様子

写真左：「分間江戸大絵図完」(享和 3 年(1803)刊行)、霊岸島付近の切抜きです。

写真右：同上区域付近の現代図

霊岸島(中央区新川 1・2 丁目)には、越前福井藩 松平越前守の中屋敷(27000 坪)が位置していたため、浪士たちはその外側を迂回することになります。この辺りで、町人が耳にした浪士たちの会話が残っています【浅野浪人敵討聞書】。

「殊の外くたびれた。この程度のことで、それほどくたびれる筈はないのに」、「安堵したから疲れたのだ」
 「手傷は痛まないか」、「嬉しさに痛みも分からない。3 人まで討ち取ったが、見られたか」、「確かに見た。鋭いお働きであった」

弥兵衛という老人、長刀は他の者に持たせ、竹杖をついて歩いていた。(弥兵衛)「普通の所でも足がよろよろなのに、今朝はあの屋敷でどうしていたか。さぞ見苦しいことであつたろう」、(誰か)「今の様子とは違い、

今

朝の働きは若い者も及ばない」、(弥兵衛)「それ程でもない。殊の外くたびれた」



①；永代橋 ②；豊海橋 ③；高橋 ④；松平邸(…で囲んだ部分)

5. 鉄砲洲での尋問受けと「浅野内匠頭邸跡」

写真左：「江戸大絵図」(元禄 12 年(1669)刊行)、浅野邸～西本願寺付近の切抜きです。

浪士たちが鉄砲洲通りを右折後、通りの左側にあった奥平熊太夫中屋敷;①の門前で、家士桜井惣右衛門から尋問を受けます。その先(西側)には隣接して浅野家上屋敷;②がありました(引揚げ時は酒井靱負佐の屋敷)。この辺りは鉄砲洲と呼ばれていました。③は築地川、④は西本願寺です。

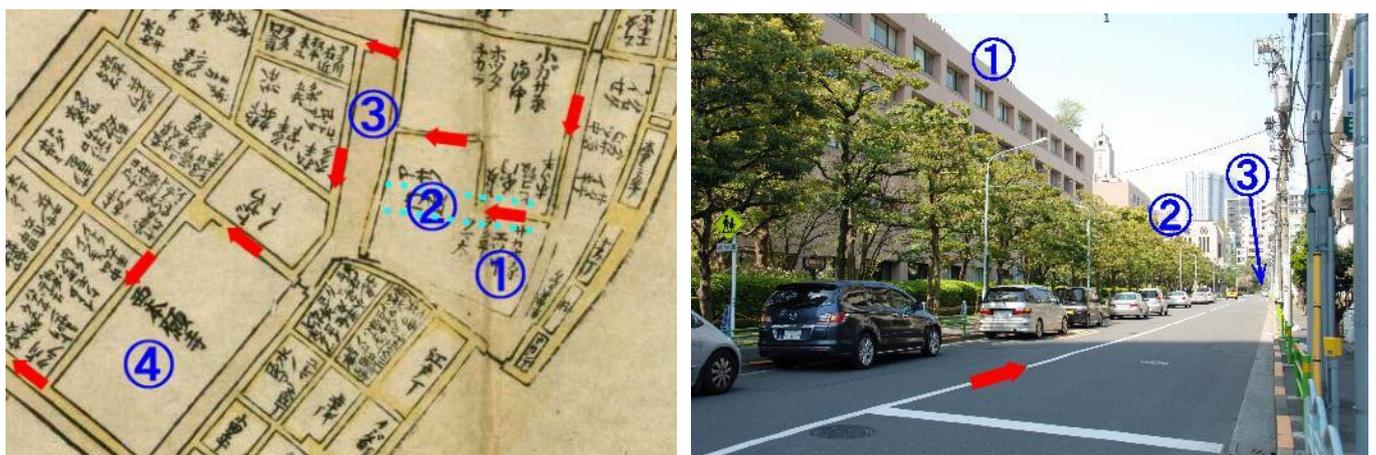
【奥平家家士桜井惣右衛門正朝書翰】

12 月 15 日の朝 6 時過ぎ、浅野内匠頭家来四十七士が吉良邸へ討入り、引揚げの途中当家の門前をその一団 20 人ばかりが通った。槍や長刀は鞘もなく、白き木綿布で刃のところを巻き込んでいた。吉良様の首と思われるものは白き布に包み、長刀の柄にかけ 2 人で担いでいた。その様子が異様なので自分は尋問しない訳にはいかず、進み出た。奥田孫太夫という者に聞きただしたところ、『私たちは浅野内匠頭の家来で、御存知とは思いますが、吉良邸に討入り、日頃の本望を遂げ、首を泉岳寺に持参、亡主の墓前に手向けるためにこれより向かうところである』と答えた。

写真右：写真左の…部分を撮ったものです。左手前の建物は聖路加国際病院;①(中央区明石町)、その先は聖路加看護大学;②、突当りは築地川公園(当時は築地川);③です。聖路加看護大学敷地内の西南角辺りに「浅野内

匠頭邸跡」の石碑が建っています。

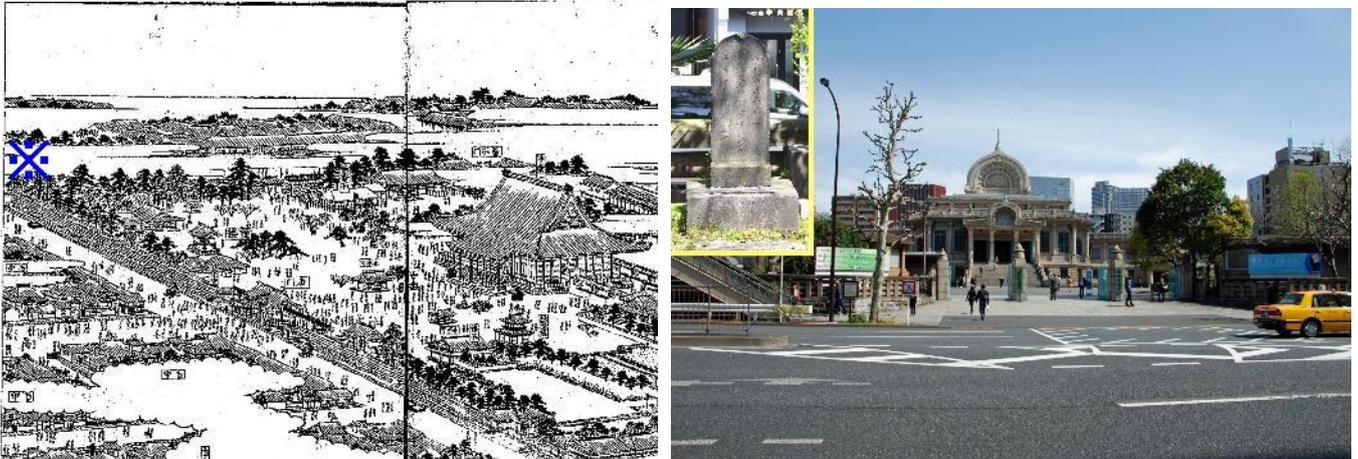
浅野家上屋敷は築地川に面していましたので、2 年ほど前までは主邸であった建物を対岸から眺めながら進んだ浪士たちには、万感胸に迫るものがあったものと思われます。



6. 西本願寺沿いでの浪士の様子

写真左：「江戸名所図会 西本願寺」、写真右：築地本願寺と間新六の墓

浪士たちが西本願寺の北角;※を築地方向に左折したところで、間新六(23、喜兵衛次男)は塀越しに、金子と槍を境内に投げ込んだと伝えられています。切腹した浪士の内、新六だけが西本願寺(姉の嫁ぎ先である中堂家の菩提寺)に埋葬されました。境内の一角には新六の墓があります。今日でも、新六の槍(赤槍)は寺宝として保存されていますが、見学はできません。



間新六には、もう一つエピソードが残っています【赤城土話】(水野家医官東城守拙による記録。水野家は討入り後から切腹執行まで9名を預かった大名です)。

札ノ辻まで来た時、間新六がぼったり倒れこんでしまった。父親の喜兵衛が、「ここまで来たのではないか。もう少しだ、不甲斐ない奴だ」と叱ったところ、しばらくして立ち上がり泉岳寺に向かったのである。

註：「札ノ辻」は江戸時代の高札場の跡です。ここでいう札ノ辻は、JR 田町駅西口から第1京浜を横浜方向に200mほど行った所にある交差点で、第1京浜と三田通りとが交差しています。

7. 旧東海道での尋問受け

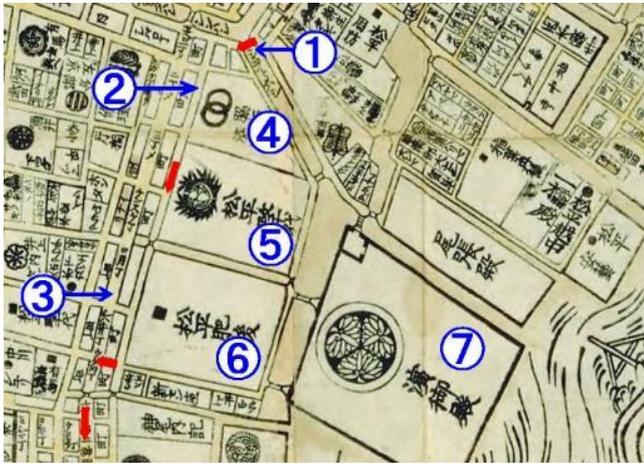
写真左：「分間江戸大絵図完」、汐留橋～松平邸付近の切抜きです。

写真右：日本テレビ局北玄関前付近

汐留橋;①を渡って旧東海道;②をしばらく進むと、当時は道に沿って脇坂淡路守;④、伊達陸奥守;⑤、松平肥後守;⑥の屋敷が並んでいました。その中の伊達家門前(日本テレビ局前辺り)で尋問を受けます。浪士たちから事情を聞いた伊達家の応接者大堀庄助は、礼を尽くして通過させたようです。

尋問受け後、松平家前を通過したところで右折して、通り町筋(第1京浜);③へ出ます。

日本テレビ北玄関前には「江戸時代の仙台藩上屋敷表門跡」の説明板があり、浪士がこの前を通ったことや、粥のもてなしを受けたことなどが記されています。



脇坂淡路守;④は、赤穂城の受城使だった大名の一人であり、次の藩主が赤穂に転封してくるまでの約1年半、赤穂城に在番しています。

濱御殿;⑦は、元は甲府藩下屋敷の庭園だったものが、徳川將軍家の別邸浜御殿や、宮内省管理の離宮を経て東京都に下賜され、現在では都立公園(浜離宮恩賜庭園)として開放されています。

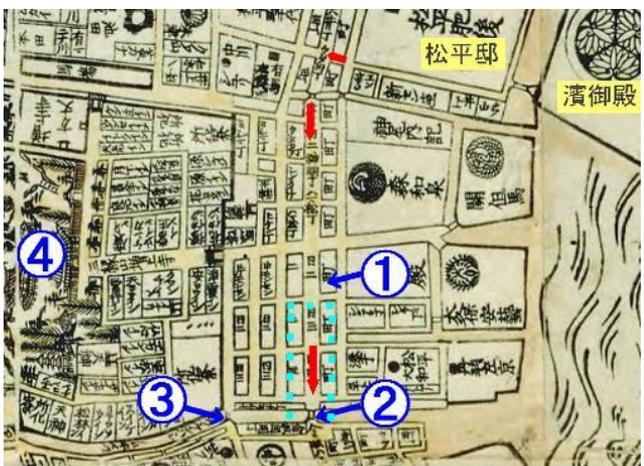
8. 金杉橋付近での浪士たちの様子

写真左：「分間江戸大絵図完」、金杉橋付近の切抜きです。

浜松町(地図では「ハマ松丁」);①を過ぎたところで金杉橋;②に差しかかります。その150mほど上流側に架かっている将監橋;③の近くには、儀貝十郎左衛門(24)の母が兄の家に病床の身を伏せていました。大石内蔵助(44、惣領主税も討入り)はそのことを知っていて、会ってくるように勧めます。十郎左衛門は、「まだ引き揚げる途中で追手がいつ来るか知れない。自分だけが特別に扱われるのは不本意であり、既に別れはしてきているので結構ござる」と断ったということです【堀内伝右衛門覚書】。(伝右衛門は細川家の家臣で、討入り後から切腹執行まで内蔵助ほか17名を預かった際の接伴役の一人です)

これまでに親子6組を加筆してきましたが、あとの2組は、吉田忠左衛門(62)・惣領沢右衛門(28)と小野寺十内(60)・惣領幸右衛門(28)です。

写真右：金杉橋付近(写真左の・・・部分)。金杉橋;②は都心環状線の下を流れている古川に架かっています。



9. 三田八幡宮付近での様子

写真左：「江戸名所図会 三田八幡宮」 写真右：御田八幡神社

浪士たちが三田八幡宮(御田八幡神社)辺りまで来た時、一行の前に脱盟者の高田郡兵衛(元200石取り)が酒樽を持って現れます。郡兵衛は泉岳寺にも現れています(後述)。

郡兵衛が麻袴で正装して、浪士たちに「今朝本意を遂げられたことは、おめでたいことである。只々お疲れで

ござる。一献参らんと酒樽をお持ちした」。誰も応答しなかったが、ただ一人、堀部弥兵衛が、「ご覧あれ、吉良を討って只今引き揚げてござる」と答えた【赤城土話】。



10. 泉岳寺到着直後の行動及び赤穂義士墓

写真左：赤穂義士墓、写真右：義士墓の配置図

(1)到着直後の行動

【自明話録】(泉岳寺の僧 自明が見聞きしたことを書き留めたもの)

自分は19歳で泉岳寺にいた。12月15日は朝食も終わり、仏さまにお茶を献ずる礼茶の儀式の準備のため、一同は衆寮から出て本堂に集まっていた。そこへ門番がやって来て寺務を掌る副司に、「元浅野内匠頭の家来50人余りが異様な姿で槍や長刀を持って門に入ってきたが通しても良いか」と尋ねた。副司はびっくりして長恩和尚に相談した結果、検分のため役僧頭を門へ遣わした所、一行は既に浅野内匠頭の墓のある墓地へ通ったあとであった。

吉良上野介の首を洗って亡君の墓前へ供え無念を晴らしたことを報告し、焼香に移る。第一は一番槍の間十次郎、第二は一番刀の武林唯七、第三は大石内蔵助、その後順次四十一人が焼香した。

よほどお腹が空いていたとみえて粥を沢山食べ、その後、茶、茶受けを出し、風呂を勧めたが、敵襲を警戒して誰も入らず、そのうち皆よく眠ってしまわれた。

【義士実録】

その内に、一般の民衆も境内に入ってきたので、3人の義士が槍で威嚇して門外に出したということである。寺側では早速、門に番を付け、民衆が寺には入れないように規制措置をとった。

【堀内伝右衛門覚書】

一党が泉岳寺に到着して休息していると、高田郡兵衛がまた酒樽を持参して面会を求めてきたので、不破数右衛門(33)が「あんな者は、刀を使うこともあるまい。踏み殺してやる」といきり立った。しかし大石から「あの者を殺して何の益があるか」と諫められたので、数右衛門も静かになった。

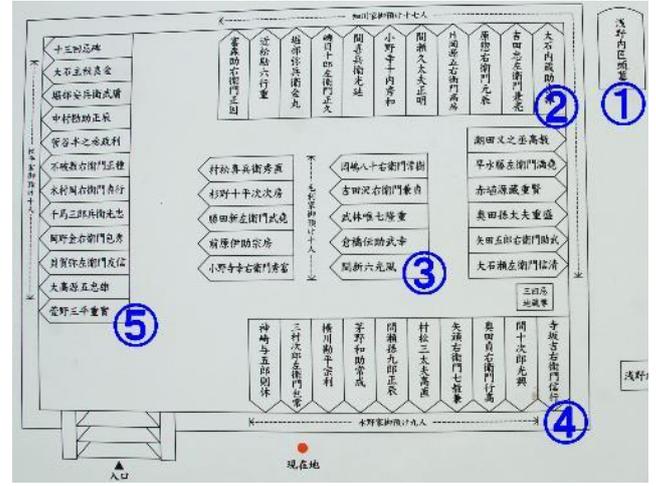
(2)赤穂義士墓【泉岳寺HP】

赤穂義士は元禄16(1703)年2月4日に切腹した後、直ちにこの地に埋葬されました。ただし、間新六の遺体は遺族が引き取っていきました。また、寺坂吉右衛門(38)は本懐成就後、瑤泉院など関係者に討入りを報告して廻り、後に江戸に戻って自首しましたが赦され、麻布・曹溪寺で83歳の天寿を全うしました。現在も曹溪寺に眠っています。

泉岳寺にある間新六の供養墓は他の義士の墓と一緒に建立されましたが、寺坂の墓は慶応4年(1868)に供養のために建てられたものです。

また、四十七士の他に、本人は討入りを熱望したものの周囲の反対で討入り前に切腹した萱野三平(享年28)の供養墓があります(明和4年(1767)建立)。

したがって、泉岳寺の墓碑は48基あります。



①;浅野内匠頭墓 ②;大石内蔵助墓 ③;間新六供養墓 ④;寺坂吉右衛門供養墓 ⑤;萱野三平供養墓